三

磐音が小梅瓦町に戻ると、おとくが夕餉の膳を小屋に届けたところであった。

「約定しておらぬのに相済まぬ」

「昨日の日当は小屋に投げ込んでおいた」

とおとくは言うと納屋に戻りかけ、ふと足を止めた。

「おまえさん、金になる話があるが、乗るかい」

と磐音の反応を窺うように上目遣いに見た。

「三百文よりの高いかな」

「三百文てのは、おまえさんの仲間の仕事ぶりにちょうど釣り合いがとれた銭だわさ。三百文など目腐れ金だ」

「と申すと」

「あたしが狙われているのは確かなのさ、やつらが近々絶対にここの家に来る。そいつらを斬り殺してくれるか、身動きできないようにしてくれたらさ、一人頭十両出すよ」

「相手は何人かな」

「八人」

「名前はわかっておられるか」

「よおく承知だよ。だが、教える気はないね」

おとくの返答はにべもない。

「侍ではないのじゃな」

「二本差しじゃないよ。だが、おまえさんが油断すると、野晒しの合口にどてっ腹を抉られるよ」

野晒しとは異名か。ともかくただ者ではなさそうだ。

「命あっての物種というが」

磐音は迷うふりをした。

「やるのかい、やらねえのかい。浪人に何十両は代金だろうがさ」

「一生に一度の大仕事、請け負うた。おばばどの、着手金はいただけぬのか」

「日当百文の鰻割きが欲をかくんじゃないよ。金はうまくいっての報酬だ、ちゃんと払ってやるよ」

「命を張った仕事なればこそ、いくらかなりと払ってほしいものじゃ」

磐音は粘ってみた。

おとくがなにかしゃべらないかと思ってのことだ。

「まあ、考えておくよ。ともかくさ、野郎どもが来るのを見落とさないようにしっかり見張るんだよ」

おとくはそう命じると納屋に入っていった。

翌朝、宮戸川の仕事を終えた磐音は、両国を渡って南町奉行所に年番方与力の笹塚孫一を訪ねた。

「そなた、やけに生くさいな」

笹塚は、鼻をくんくんさせた。

「鰻の臭いにございます。いつもは仕事の後に湯に入るのですが、今朝はこちらに伺うのでまだなのです」

「火急の用か」

磐音は昨日、おとくから提案された一件を話した。

「人ひとり殺すか、怪我をさせて十両か。なかなかの仕事ではないか、そなたの腕前ならば、八人全部始末できよう」

南町奉行所の腕利き与力が嗾けるように言った。

「本気で請け負うてよろしいので」

「近頃の磐音どのは、なかなか隅に置けぬな」

そう言うと笹塚は、若い同心に、

「例繰り方同心の逸見五郎蔵を呼べ」

と命じた、磐音に言った。

「例繰方と申すは、下手人の罪科の情状を調べあげて、お白洲のお裁きの参考に具申したり、後日のために犯罪歴を文書にしておく係だ」

と説明した。

「お呼びにございますか」

と姿を見せたのは、ひょうろりとした痩身の初老の同心だった。

「そなたの知恵を借りたい」

「なんぞございましたか」

「野晒しなる異名に覚えはないか」

「野晒しにございますか」

逸見は首を捻った。

笹塚が磐音を見た。

「坂崎、それがしに話したことを今一度、逸見に話してくれぬか」

頷いた磐音は、竹村ざえもんから譲られた三百文の仕事から、おとくから持ちかけられた新たな提案まで、すべて話し始めた。

逸見は懐から書付帳を出し、腰に差していた矢立から筆を抜いて、心覚えを書き取っていった。

二度目の話を笹塚は軽く瞑想して聞き入っていた。

話を終えたとき、逸見の顔が綻んでいた。

「笹塚様、おもしろうございますな」

「この坂崎の旦那が持ち込む話に外れはないわ。それに銭になる」

と不敵に笑った。

「逸見、なんぞ思い出したか」

「笹塚様、押し込み一味、霜夜の鯛造と手下の四人が密告で捕縛されたのは、六年前のことではありませんでしたか」

「おおっ、明和五年の春先だったかのう」

「奉行所に何者かが、通り旅籠町の宿に泊まっている。公事で出てきた上州の庄屋と奉公人の五人組を調べよ、押し込み一味の霜夜の鯛造だと、知らせてきたのが発端でした」

「思い出した。捕縛してみると、密告通りに霜夜の鯛造と子分どもであったな。鯛造め、押し込み一味と認めはしたが、いくら責めてもそれまで盗んだ金の在処も他の手下の名前も吐かずに、獄門台の露と消えた。盗賊とは申せ、なかなかの男であった」

「それがしが鯛造の言葉で今も覚えていることがございます。拷問に責められた鯛造が、お役人、盗んだ金の在処を地獄まで持っていく気はねえ。だが、ちょいとばかり時を貸してくださえと申した一言でございますよ」

「そんなことを言ったか」

「苦し紛れの言葉と思われましたが、こうなるとちと事情が違うのではございませんか」

「どう違う」

「鯛造は昔気質の盗人でございましたな。大店を狙い、その家の奉公人に気が付かれないように主の寝間に押し入り、霜夜の鯛造一味と言い聞かせ、蔵を開けさせると、有り金の半分ほどを残して、もう半分を盗んでいった」

「あとで商いに差し支えなきようにとの、盗人なりの配慮であったな」

「はい。それに刃物は振るわせず、むろん女どもに悪戯もさせず、霜の夜のように静かに仕事を終えるので、霜夜の鯛造と呼ばれておりました。鯛造は、確か野州無宿と思いましたが、配下の者や仲間内にも一目置かれる存在でしたよ」

「それが密告されて、捕縛された」

「密告は的確でございました。となるとまず考えられるのは仲間割れにございます。鯛造は、一言も吐きませんでしたが、一緒に捕まった手下が、密告した仲間の名を洩らしたような記憶がございます。笹塚様、文庫を調べ直しますので、しばらく時をお貸しくださいませ」

逸見が笹塚に頼み、その場を退去した。

「坂崎磐音どのは、ほんに南町の金蔵じゃ」

と本気とも冗談ともつかぬことを洩らした笹塚は、

「霜夜の鯛造の盗み貯めた金は、三千両では利くまい」

「まだどこかに隠されているのでございますか」

「鯛造は、手下たちが持ちつけぬ金に溺れて身を持ち崩すことを、さらには町方に捕縛されることを恐れた男だ。だから、一連の仕事の終わるまで配下には、かねをすべて分配しなかったのだ。それに不満を持った手下が垂れ込んだと推量される。となれば、金はまだどこぞに残されているのではないか」

「おばばどのがその金を」

「そこがまだ分からぬ。となると霜夜一味の残党と思われる女に引きこまれた坂崎どのは、大事に務めに励まねばならぬな」

「今宵にもおばばどのの恐れる者たちが襲ってきたらどうします」

「われらも小梅河原町に出張って見張り所を構えよう」

笹塚は、磐音におとくの家の周辺の地図を書かせ、

「瓦職人に化けて、何人か送り込むか。源森川からはどれほど離れているな」

と訊いた。

「せいぜい一丁半とは離れておりませぬ。確か瓦屋の敷地には、引き込みの水路がありました。あれを使えば、おばばどのの住む納屋の裏手近くまで舟で入り込めます」

笹塚は磐音が書き足した水路を煙管の雁首で指し、

「そなたは普段通りの暮らしを続けよ。そなたが夕刻におとくの家に行くまでには、手筈を整えておく」

と言い切った。

深川六間堀の金兵衛長屋に戻ると、大家の金兵衛が異名どおりのどてらを着て、

「おこもみてえな女がさ、おまえさんのことをあれこれを訊いて回っていたそうだ。坂崎さんは近頃、そんな女とも付き合いがおありか」

と訊いてきた。

「いつのことでございますな」

「昨日のことだよ」

おとくは宮戸川で聞き込みしたと同様に、長屋で磐音のことを調べていったらしい。

「女はさ、おまえさんがいつから長屋に住んでいるのか、暮らしはなにで立てているのか、仲間はどうかなどを訊いたとさ」

「竹村武左衛門どのから譲られた仕事の雇い主にございますよ」

と磐音は、当たり障りのないところを話した。

「徹夜仕事をしてたったの三百文だって！呆れたね、当世、棒手振りだって倍は稼ぐよ。やめな、やめておきな」

「竹村どのの紹介でござればそうも参りませぬ。それに徹夜と申しても床に入っても寝ているだけですから」

「それにしてもさ、長屋のかみさん連がおこもと間違える女の用心棒とは、坂崎さんも落ちたもんだねえ」

金兵衛が慨嘆した。

磐音は言われっ放しですごすごと長屋の戸を開けた。するとなにか違和感を感じた。だれか入り込んで調べていった者がいるらしい。

手造りの位牌の位置が微妙に違っていたし、その前に置いていた奈緒の扇子が四本とも開かれた跡があった。

磐音は八日の一件で吉原の丁子屋から貰った二十五両を隠していた消し炭の壺を調べた。だが、触った痕跡はあったが、金子は残されていた。ただの泥棒ではない。考えられることは、おとくがだれか、夜中に訪ねてきた史吉を使って部屋を調べたということではないか。

磐音は、

（二十五両を隠し持っていることをおとくがどう判断したか）

としばし考えた後、湯に行く仕度をした。

磐音が六間堀から小梅瓦町に向かおうとすると、遊び人風の男がすいっと方を寄せてきて、

「旦那、お久しぶりで」

と挨拶した。よく見れば、南町奉行所定廻り同心の木下一郎太だ。

「坂崎様、手配りがつきましてございます。南側の瓦屋と小屋、それに堀割の水路に荷船が浮かべてございますが、ここにもわれらの仲間が潜んでおります」

「相分かった」

「おとくですが、霜夜の鯛造の娘かと思われる、との笹塚様からの言付けにございます」

「盗人の娘？鯛造は、いくつで処刑になったのでございますな」

「それがしがまだ見習い同心にございましたので、うろ覚えですが、五十三、四であったと思います」

「今生きていれば、六十ですが」

するとおとくは老婆を装っているが、せいぜい三十から四十前ということではないか。

「ではこれにて」

と声を潜めて言った一郎太が、すいっと町の夕暮れに溶け込むように姿を消した。

磐音がおとくの家の敷地に入っていくと、膳を抱えて家から出てくるところだった。

「おおっ、これは相済まぬことでございます」

磐音が膳を受け取ろうとするとおとくが、

「手付けに五両ほど渡しておくよ」

と言った。

膳の上には小判五枚と三百文の銭が載せられていた。

「これは恐れ入ります」

膳を受け取った磐音は、

「夕餉の菜は、ひじきですか。母がよう作ってくれました」

と微笑んだ。里芋の煮付けも添えられていた。

「なんぞそれがしにできることあらばいたすゆえ、命じてくだされ」

おとくがじいっと上目遣いに見た。

「いや、することがないでな」

磐音を一瞥したおとくあ、踵を返して家を戻った。

磐音は、薄明かりの中で夕餉を食し終えると盆と器を井戸端に運び、洗った。あとは、夜具に包まって座し、時が過ぎるのを待つ退屈な仕事に入った。

磐音は霜夜も鯛造という押し込みの娘としれ、鯛造を町方に売った一味がおとくを始末に来るのは、どうやらほんとうのことと分かった今、眠るわけにもいかない。

夜半過ぎ、忍びやかな足音がした。

戸の隙間から見る人影は史吉だった。

史吉は一刻ほどいて再びおとくのもとから姿を消した。

何事も無く夜が過ぎゆき、磐音は、宮戸川に行く前に抜き差しの稽古を繰り返して眠気を吹き飛ばした。

宮戸川の鰻割きを終えた磐音は、今日こそはと六間湯に行った。

洗い場で二日分の汚れと臭いを洗い流すように丁寧に糠袋で全身を擦り上げ、柘榴口を潜ると、湯に大頭が浮かんでいた。

南町奉行所の切れ者与力笹塚孫一だ。

「何事もなく一夜が明けたようだな」

「はい。史吉と申す若者が一刻ほと話し込んでいったきりです」

ああ、と頷いた笹塚は、

「野晒しのことが分かった」

と言った。

「霜夜の鯛造と一緒に捕まった手下は、上総の伴吉ら一味の古手ばかり四人だ」

と言うと笹塚は、湯の中に浸けていた手を出してつるりと顔を撫でた。

「霜夜一味は、引き込みの女を含めて十五、六人と目されていた。引き込みとはな、日当の店に女中なんぞに化けて入り込み、仕事の夜に内から引き込む役だ。さて、親分以下、幹部四人を密告した者はたれか。一味の中に野晒しの仲蔵という役者崩れがいてな、こやつが野晒しのしゃれこうべの彫り物を背に入れているところから、仲間内で、しゃれこうべとか、野晒しの仲蔵と呼ばれていたらしい。六年前が三十二だ。こいつが鯛造の押し込みのやり口につねつね不満を抱いていたそうな。忍び込んで半金も残してくる馬鹿がどこにいる。盗人なら盗人らしく有り金全部を掻っ攫ってくるのが筋だというのが仲蔵の考えだ。鯛造に直言したこともあったらしいが、鯛造は、おれが頭分のうちは、絶対に許さないと撥ね付けたそうな。こういうことはな、鯛造と一緒に捕まった錠前外しの虎三が言い残したことだ」

「町方に親分のことを売ったのは、野晒しの仲蔵ですか」

「仲蔵の他にはいなさそうだ。鯛造がなにも喋らないまま打首になった後、奉行所でも残党を狩り出して捕縛し、隠し金の有り処を吐かせようとした。厳しい警備に業を煮やした仲蔵たちは、上方あたりにほとぼりを冷ましに移ったとも思われる」

「それが六年過ぎて、江戸に舞い戻ってきたよ」

笹塚が頷き、言った。

「推量ではそうなる。となると昔、盗んだ金を取り戻そうと画策してのことだろう」

「おばばどののことはなにか分かりましたか」

「鯛造は、裁きの前にひたすら願ったことがある。家族はわっしのしごとを知っちゃいません、どうか、お慈悲を、と言い残して死んだぞうな。そのとき、亡くなった女房との間に娘が一人いるが、相州の大磯宿で爺様、婆様と暮らしていると言い残していた。それがどうやらおとくと思える」

「よう、おばばどのと分かりましたな」

「霜夜の鯛造が江戸で押し込みを働くようになったのは、女房が流行病で亡くなったことがきっかけだ。今から十二年前のことだ。それまで鯛造一家は伊勢、津藩の下屋敷の裏手、上駒込村に住んでおったのだ。昨日、調べた行かせて分かったことだ。おとくは母親が亡くなったとき、十七歳、この年に江戸を去って、母親の実家のある大磯村に移り住んだのだ」

「笹塚様、おばばどのは、ただいま二十九歳の女盛りにございますか」

「そういうことだ」

磐音も鉄五郎親方もおとくが若いのではと推量していたが、二十九歳とは考えもしなかった。

「おとくは仲蔵たちの追及を恐れて、老婆に扮しているのでしょうか」

「とも考えられる。だがな、そなたに一人十両で始末を頼んだ背後には、父親の仇を打たんとする思いが隠されているのではないか」

「おとくがわざと仲蔵たちを誘き寄せようとしているということですか」

「その辺は、仲蔵とおとくを捕縛した上で、調べてみぬと分からんがな」

二人は、湯から流し場に上がった。

「笹塚様、今のところ、おとくは何の罪科も犯してはいませぬ」

「わしが知るところではない」

「おとくを牢に送る真似だけはしたくございません」

笹塚が頷き、訊いた。

「おとくの頼み、そなた、どうする気だな」

「さて、思案に余ります」

そう答えた磐音の顔を笹塚が下から見上げて、ふいに背中を向けて石榴口から姿を消した。

磐音はしばらく薄暗い洗い場の中で